

オペラ「魔笛」を鑑賞

川口 ひろ子

「魔笛」は、多くの試練を乗り越えて成長する若者たちの姿を描いたオペラだ。作曲はw・A・モーツァルト、1791 年ウィーンで初演された。映像は、採りためていた録画の中から 2019 年イギリスのグラインドボーン音楽祭での公演。

バルブ&ドゥセー両氏の新演出では、時代を 20 世紀初頭、老舗ホテルの世代交代劇に読み替えていた。演奏はエイジ・オブ・エンライトウメント管弦楽団、古楽特有の歯切れの良い演奏を期待したが外れた。鼯員のロビン・ティティアーティとは別人の指揮で、緩いテンポに失望した。

王子タミーノはホテルの宿泊客、メイドのパミーナに一目惚れしてホテルマンになる決心をして厳しい修業に挑む。ザラストロは総料理長で大勢のスタッフを纏め上げて貫禄十分だ。柔らかなバスの低音が魅力に溢れている。夜の女王はホテルの女将。期待したコロラチューラの高音は音量不足で気の毒、演技も稚拙で残念だ。意外だったのはパパゲーノの熱演だ。「恋人がほしい」と強烈に訴える。艶やかで弾力に富む声と渾身の演技に盛大な拍手が贈られていた。

ほぼ 232 年前の原作通りであるが、フィナーレの物語の逆転は理解できない。恐るべき悪の指導者であったザラストロは英明の支配者となり、善を代表していたかに見えた夜の女王は何時の間にか悪者となり地獄に落ちる。「魔笛」を鑑賞する度に、まあ西洋のお伽噺だから、と強引に自分を納得させてきたが、今回の新演出も終幕で大逆転だ。憎み合っていた夜の女王とザラストロは和解、一同目出度し目出度しで幕となる。私は、ばらつきの多い歌唱と演奏面では不満が多いが原作の意図を尊重した読み替えが素晴らしく、時間をかけて入念に創り上げられた名舞台だと思った。特に舞台美術や衣装は細部にまで神経が行き届いている。

「魔笛」を見終わった時、何故か、何とも言えない幸せ感に包まれる。今回も「これで充分！」もうこの世の諸々はどうでもよくなってしまうのだ。